死生学とスピリチュアリティ

令和 3 年 12 月 31 日
敏翁

はじめに

今年は「コロナ巣ごもり」に終始しましたが知的活動と言えるものは読書でした。
読書数は数十冊に及びましたが、ここまで熱中出来たのは掲題のテーマ
「死生学とスピリチュアリティ」を見付けたからです。
本文は、それを探し当てた経緯とその概要を纏めたものです。

Ⅰ．経緯

１．１　日本宗教史の発行が続く

今年の春頃、朝日新聞で昨年から今年にかけて、宗教史に関する
出版が続いている事の紹介がありました。
それは、
Ａ．日本宗教史　全６巻　昨年発行完　吉川弘文館
Ｂ．近代日本宗教史　全６巻　本年７月発行完　春秋社
についてです。
早速横浜市立図書館で借用取り寄せ、本年８月迄に全 12 巻完読しました。
多分借用して全巻完読したのは私が初めだと思っています。
それは、Ｂの最終第６巻を図書館が購入する前に、到着したら先ず私が
借用できる手続きをしていたからです。この第６巻「模索する現代」で、
「死生学とスピリチュアリティ」を知る事に成る訳ですが。

この様に発刊が続いた時代背景としては、次の様な事が考えられます。
「日本宗教史」の発行の言葉　から採って見ます。

現代人にとって、宗教をどう理解し、いかに向き合うかは重要な課題である。
それは、私たちにとって、自らの歴史と文化を認識する上で必要である　とともに、
世界の中で日本がどのような位置にあるのかを認識する上でも　不可欠なことになる。
(中略)
二十世紀の日本の人文学では、日本宗教史は必ずしも中心的な論点とはされて
こなかった。
それが重要な研究テーマだとは気づかれていなかったのである。
だが、その後、日本の人文社会系諸学を取り巻く状況は大きく変化した。
かって大きな影響力を持ったマルキシズムはその魅力を失い、新たな
時代に即した形での思想の再構築が必要になっている。
また、「ポストモダン」と呼ばれたいくつかの思想的・ 学問的営みも新たな世界認識

を提示できているとは言いがたい。

その間、世界の各国や日本でも偏狭なナショナリズムが高揚を見せている。

本シリーズは、そうした内外の諸状況を見すえて、日本宗教史という視座から日本の社会や文化、そして世界の中での日本の位置を考究しょうとするものである。

以下略

また、「近代日本宗教史」巻頭言からも採ってみます。

時代はどこに向かっていくのだろうか。 近代的価値観が疑われ、「戦後」の理念は大きく揺らいでいる。 (中略)

近代史の中で、もっとも研究の遅れていたのは宗教史の分野であった。 近代社会において、宗教はともすれば前近代の名残として否定的に捉えられ、社会の合理化、近代化の中でやがて消え去るべき運命のものと見られてきた。 それ故、宗教の問題を正面に据えること自体が時代錯誤的であるかのように見られ、はばかられた。

これまで信頼できる近代日本宗教の通史が一つもなかったことは、我々関連研究者の怠慢という面もあるが、いかにこの分野が軽視されてきたかをありありと物語っている。

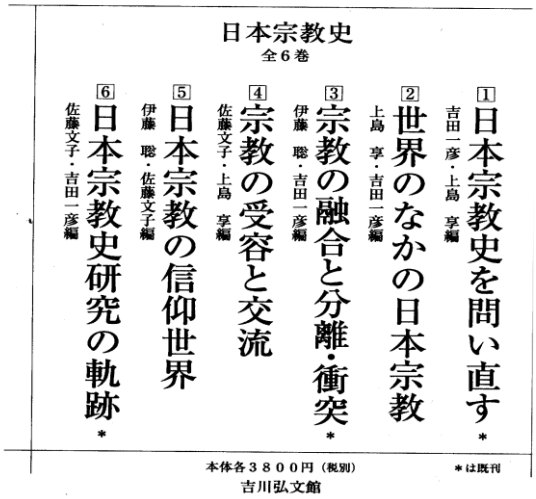
しかし、今日の世界情勢を見るならば、 もはや何人も宗教を軽視することはできなくなっている。 (中略)

さいわい、最近この分野の研究は急速に進展して、従来の常識を逆転するような新たな成果が積み重ねられつつある。 宗教から見た近代や近代史の問い直しも提起されている。

そのような情勢に鑑み、ここに関連研究者の総力を挙げて、はじめての本格的な近代日本宗教史を企画し、刊行することにした。 以下略

の----------

A．日本宗教史全六巻のタイトルをご覧にいれます。



またＢ．近代日本宗教史全六巻のタイトルと内容をご覧にいれます。

近代日本宗教史［全６巻］

第１巻　維新の衝撃――幕末～明治前期
明治維新による国家の近代化が宗教に与えた衝撃とは。過渡期に模索された様々な可能性に触れつつ、神道、仏教、キリスト教の動きや、西洋思想受容の過程を論じる。（第１回配本）

第２巻　国家と信仰――明治後期
近代国家日本として国際社会に乗り出し、ある程度の安定を得た明治後期。西洋文化の受容により生まれた新たな知識人層が活躍を見せる中で宗教はどのような意味を有したのか。（第３回配本）

第３巻　教養と生命――大正期
大正時代、力を持ってきた民間の動きを中心に、大正教養主義や社会運動、霊能者やジェンダー問題など新たな思想の流れを扱う。戦争に向かう前、最後の思想の輝き。（第２回配本）

第４巻　戦争の時代――昭和初期～敗戦
天皇崇敬が強化され、著しく信教の自由が制限されるなかで、どのような宗教現象が発生したのか。戦争への宗教の協力と抵抗、そしてナショナリズムの思想への影響を考察する。（第４回配本）

第５巻　敗戦から高度成長へ――敗戦～昭和中期
敗戦により新たな秩序が生まれ、焦土から都市や大衆メディアが立ち上がる。「神々のラッシュアワー」と表現されるほどの宗教熱の高まりとは何だったのか。新たな時代の宗教現象を扱う。（第５回配本）

第６巻　模索する現代――昭和後期～平成期
現代の閉塞感のなかで、宗教もまた停滞するように思われる一方、合理主義の限界の向こうに新たなニーズを見いだす。スピリチュアリティや娯楽への宗教の関わりから、カルト、政治の問題まで。（第６回配本）

第六巻の中に「スピリチュアリティ」が見えます。

１．２　私が求めていたもの

しかし、私が求めていたものは少し違うものでした。
即ち、私の拙論『仏説大東亜戦争』の宗教的根拠、それは、拙論が大東亜戦争は、大乗仏教的、法華経的に言って大和民族または日本国民の集団的捨身布施であるという論理展開の根拠です。

問題点は、宗教は個人の救済が目的な事は疑いが無いとして、それを集団の行動に

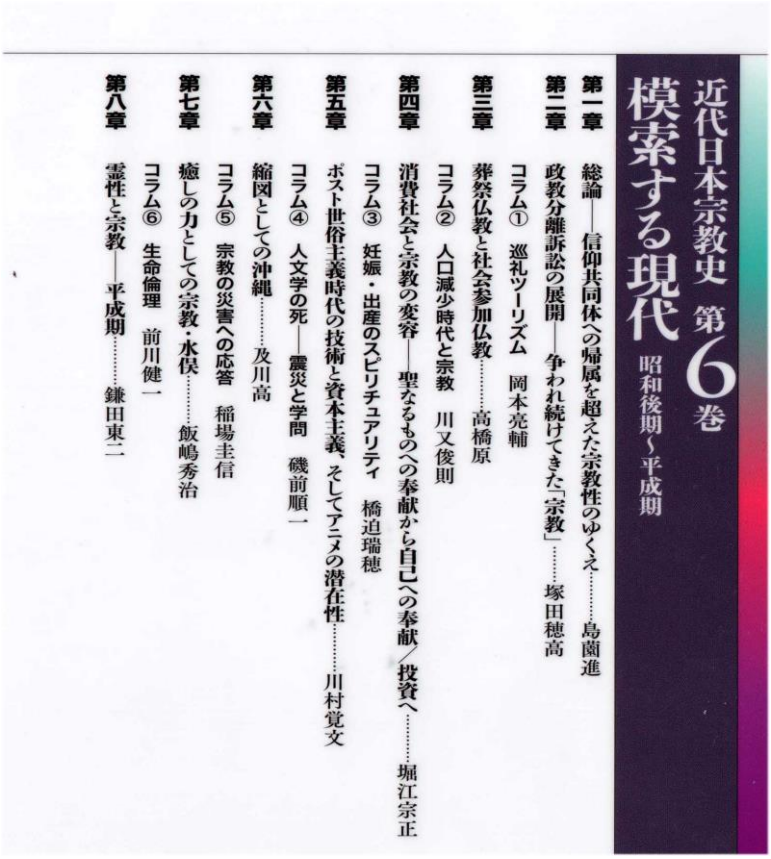
拡大できるかと言う点です。
　尚、『仏説大東亜戦争』とその関連は本ホームページからご覧頂けます。
　原点は、17「仏説大東亜戦争」ですが、その論議を展開したものが、15～12、10 とあります。その中で 10「宮沢賢治とグスコーブドリ」により近代的な捨身布施の再構築が宮澤賢治によって行われた事の重要性の指摘は私が初めてだと思っています。

　しかし、このＡ.とＢ.全 12 巻からはそれらしい根拠を見出す事は出来ませんでした。この大戦に対する宗教家の責任に触れたものは多々ありましたが、この大戦のポジティブな意義に触れたものは皆無であり、私から見ると情けない学者ばかりが目立ち、不満が溜まっていましたが、最後にＢ．第 6 巻から死生学とスピリチュアリティを知る事に成り、これは大きな収穫となった訳でした。
　この問題は後期高齢者である我々にとって最重要なテーマである筈と思いました。

Ⅱ．死生学とスピリチュアリティ

２．１　模索する現代

　Ｂ．近代日本宗教史　第六巻　「模索する現代」(◎　B-6 と略記　以下同様)で「死生学とスピリチュアリティ」に出会う訳ですが、その概要は、下に掲げた B-6 裏表紙から大凡分かると思います。


近代日本宗教史 第6巻
模索する現代
昭和後期～平成期

第一章　総論――信仰共同体への帰属を超えた宗教性のゆくえ……島薗進
第二章　政教分離訴訟の展開――争われ続けてきた「宗教」……塚田穂高
コラム①　巡礼ツーリズム　岡本亮輔
第三章　葬祭仏教と社会参加仏教……高橋原
コラム②　人口減少時代と宗教　川又俊則
第四章　消費社会と宗教の変容――聖なるものへの奉献から自己への奉献／投資へ……堀江宗正
コラム③　妊娠・出産のスピリチュアリティ　橋迫瑞穂
第五章　ポスト世俗主義時代の技術と資本主義、そしてアニメの潜在性……川村覚文
コラム④　人文学の死――震災と学問　磯前順一
第六章　縮図としての沖縄……及川高
コラム⑤　宗教の災害への応答　稲場圭信
第七章　癒しの力としての宗教・水俣……飯嶋秀治
コラム⑥　生命倫理　前川健一
第八章　霊性と宗教――平成期……鎌田東二

主にこの第一章総論、
第四章消費社会と宗教の変容
(B-6-4 と略記)、
第八章霊性と宗教で出会ったのです。

そして、そこに引用された参考文献、及び「死生学」、「スピリチュアリティ」の検索で見出した書籍に拡げていったのです。

２．２　スピリチュアリティの興隆／霊魂の存在

中でも第一章総論の第三節　「スピリチュアリティの興隆」(B-6-1-3)
は近年の動向を旨く要約していると思うのでその全文を添付します。
URL は　http://toshiou1048.sakura.ne.jp/history-mjr-6-1-3.pdf
以上は、関心をお持ちの方は読んで頂きたいのですが、
この中でも特に私の興味を惹いたのが最後の小節「新しいスピリチュアリティと大衆文化」です。そのほぼ全文を以下にご覧にいれます。

新しいスピリチュアリティ（新霊性運動・ 新霊性文化） のなかでじわじわとその影響力を強めているのは、さまざまな瞑想や身心変容実践である。 一九七〇年代にはヨーガの実践が広まったが、八〇年代になると気功の実践が広まり中国の学会の影響も受けつつ、人体科学会が設立されている。 九〇年代にはユング心理学やトランスパーソナル心理学が隆盛で、アカデミズムの中にも新しいスピリチュアリティの思想や実践が根をおろしていった時期である。
ホリスティック教育や統合医療などの考え方も八〇年代以降、影響力を広めて来ており、二〇〇〇年代にはマインドフルネスへの関心が高まり、医学・ 医療関係でも多くの実践者、共鳴者を生み出すに至っている。

他方、新しいスピリチュアリティが商業化されたり、ポップ・ カルチャーとして広められる傾向が強まっている。 すでに一九七九年には学研から月刊オカルト情報誌「ムー」が刊行され、現在まで続いている。 同じく一九七九年には実業之日本社から、女子中高校生をターゲットに「占いとまじない」をコンテンツとする月刊誌「マイバースデイ」が刊行されている。一九九〇年代半ばのオウム真理教事件を経て、「宗教ブーム」が後退し、「マイバースデイ」は二〇〇六年一二月をもって廃刊に追い込まれる。橋迫瑞穂によると、若年層のスピリチュアリティへの関心は形をかえて継続しており、二〇〇〇年代に入ると「スピリチュアル市場」という形をとって継続されたという（橋迫、二〇一九）。

商業的な展開は日本に限ったことではないが、日本の場合、伝統的な仏教・ 神道や民俗宗教との親和性も高く、伝統回帰的な性格を帯びる傾向もある。 堀江宗正は「巡礼や山岳修行や参禅など、伝統的な神道や仏教の修行にネットなどの情報を頼りに人々が参加するという現象も二〇〇〇年代に顕著になる」 と述べている。 コミックやアニメ、ゲームや映画など大衆娯楽にスピリチュアルなネタが盛り込まれることも多い。「パワースポット」という用語が広まり、ツーリズムをスピリチュアリティが動機づけるような現象も目立つようになった（堀江、二〇一九）。

テレビ番組「オーラの泉」や「天国からの手紙」でスピリチュアル・ カウンセラーを自称する江原啓之、「生きがいの創造」」（ＰＨＰ出版、一九九六） などで生まれ変わりを前提とした人生観・ 死生観を説いた飯田史彦はともに九〇年代の半ばに登場し、メディアを通して多くの支持者を得た。

米国では一九八〇年代に女優のシャーリー ・ マクレーンが自らのスピリチュアル

な覚醒の経験を描いた 「アウト・ オン・ ア・ リム（地湧社、一九八六／角川文庫、一九九九） がヒットしテレビドラマにもなったが、それに対応するような新たなスピリチュアリティ流布の形態が形づくられていった（堀江、二〇一 九／島薗、二〇一二）。

堀江宗正　ポップ・スピリチュアリティーメディア化された宗教性
2019　岩波書店(堀江、二〇一九)　◎
は、江原啓之について頁を割いて論じています。
また B-6-1 の著者である島薗進は、著作「現代宗教とスピリチュアリティ」
2012　弘文館　の中に一章を設け、飯田史彦を論じています。
第 2 章　霊的世界観と共同性　飯田史彦論

江原氏の著作は極めて多いのですが、その思想を堀江氏は上記著書の中で
下記の様に旨く纏めています。
『まとめて言うと次のようになる。 “私たちは永遠に進化し続けようとする霊的存在であり、そのためにこの世に生まれ、波長や因果が引き寄せたものを通じて運命の仕組みを学んでいる。 人生には苦難がつきものだが、どんなときもあなたは守護霊や類魂(グループ・ソウル)の愛に包まれている。 これらの霊的法則は相互に絡み合い、私たちが真の幸福を得るために働いている。 さらに、人類はすべて広い意味での類魂であり、ともに神を目指して向上している仲間である。 様々な問題や事件が起きている現代社会では、無関心を超え、私たち一 人ひとりが救世手であると自覚することが急務である。“ 』

飯田氏も著作は非常に多いのですが、上記江原氏に関する纏めの様なものは見た事がありません。
ここでは、飯田氏の著作　「生きがいの創造―スピリチュアルな科学的研究から読み解く
人生のしくみ」　ＰＨＰ研究所　◎
の「はじめに　本書の内容と執筆方針」から見て見る事にしたいと思います。

本書は、各国の大学教官や医師などによる、「人生のしくみ」に関する科学的研究の成果をご紹介し、スピリチュアルな観点に立つ（精神性を重視する） 知識を活用することによって、私たちの人生観がどのような影響を受け、日々の生活がいかに素晴らしいものへと変わるかということについて考える、新しい観点からの「生きがい論」です。
したがって、本書の目的は、スピリチュアルな現象（たとえば「死後の生命」や「生まれ変わり」）の存在そのものを、証明することではありません。これらについて、あらゆる人々を一〇〇％認めさせることができるように証明することは、この世に「ポリシーとして否定することに決めている方々」がいらっしゃるかぎり、どのような方法を用いても不可能だからです。　（中略 ）
このような意味から、本書では、各国の大学教官や医師による、スピリチュアルな世

界やしくみに関する科学的な研究結果を、わかりやすく整理してご紹介します。
それらの研究結果を目にした時、それが単なる「信じたい」という水準を超えて、「認めよう」という水準にまで達しているとみなすかは、読者であるみなさんのご自由です。「まだまだ不充分だ」と否定する方もいらっしゃるでしょうし、逆に、「これだけ証拠がそろっていれば充分だ」と、驚く方もいらっしゃることでしょう。
この時、私がみなさんに問いかけたいのは、本書でご紹介する研究成果をもとに、「スピリチュアルな観点を重視するとすれば、私たちの生き方がどのように変わっていくだろうか」ということです。
決して、「認めなさい」と無理強いするつもりはありません。本書の真の目的は、否定したがる方々を説得することではなく、あくまでも、これらを認めることに迷いを感じていらっしゃる方々を勇気づけたり、これらを「信じて」いらっしゃる方々に科学的情報を提供することによって、「みなさんの人生を、大いに応援することなのです。
（ 後略）

両氏とも、霊の存在を科学的に証明しようとはしていませんが、それを取りあえず信じて見ると人生が幸せになると説いていて、それが多くの人々に支持さているのだと思います。
更に霊の存在を強く主張しているのがワイス氏です。
ブライアン・L・ワイス／エイミー・E・ワイス著
山川紘矢・亜希子訳　「前世療法―米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘」◎

山川氏の解説を借ります。
『ワイス博士は、ある時、精神的問題を抱えた患者に、子供時代に受けたトラウマを再体験させるために催眠療法を施しました。ところが彼女はずっと昔のエジプトでの前世を思い出し、それとともに精神的、した問題がどんどん消えていきました。
博士は最初、信じられませんでしたが、やがて、「私達は魂の存在であり、何回もこの地球に生まれ変わっている。死というものはなく、親しい人々との別れも一時的なものにすぎない」ということを知り始めました。
そして今、この真実を人々に伝えるために、夫人とともに世界中でワークショップを開いています。』
ワークショップでの結果は数冊の著作に纏められていますが、私が特に重要と思う事は、そこで得た多数の前世の記憶の中に、それが真実であることが証明された例が相当数確認された事です。

私は、霊魂に関して今我々が信じている自然科学では説明がつかない何かがある可能性が高い様に思えてなりません。
関心をお持ちの方はとりあえず本節で紹介した書籍、また B-6 や(堀江、二〇一九)には多数の参考文献が掲げられているのでそれら中から選んで読んでみる事を

お勧めします。

２．３　スピリチュアリティの定義

以上何回かスピリチュアリティと言う言葉を使って来ましたが、その定義は明らかにしていません。実はこれが簡単ではないのです。

この問題を堀江は、(堀江、二〇一九)の第一章「スピリチュアリティとは何か」で取り組んでいます。この中で欧米の心理学的文献に 10 種類もの定義がある事を明らかにしています。

そしてそれらを踏まえた議論の後、日本人にも適用可能なスピリチュアリティの定義として次のようにまとめられるだろうとしています。
以下の議論は難解なところもありますが、全文をご覧に入れます。

スピリチュアリティとは、 (1)非物質的なスピリチュアルなもの（a　生きる意味や目的、b　他者・ 死者・自然とのつながり、 c　より高い神的な力や霊）を探求している状態、それによる成長・ 成熟のプロセスを指し (2)諸宗教の核心部分に当たるが、 (3)個人で主観的に体験することができ、 (4)組織宗教と距離を取って世俗生活のなかで探求することも可能なものとして、これまでとらえられてきた（人々によって、またその反応を測定する心理学者によって)。

この定義によって、欧米から輸入される様々な「スピリチュアリティ」（キリスト教、心理学、ニューエイジなど）に、日本の古くからの霊への関心、近代に入って西洋から輸入されたスピリチュアリズムへ の関心をも包括する形で、「スピリチュアリティ」という言葉を学問的な分析概念、欧米の現象と日本の現象を比較分析するための道具として使うことが可能だと見込むことができる。

一方、この種の多次元的な定義には欠点がある。まず、人々の設問に対する反応を測定した結果であるため、雑多な要素が抽象化されずにまとめられている。次に、「成長・ 成熟」「諸宗教の核心」などという価値判断を含む言葉が入っており、主観に委ねられてしまう。人々の観念をまとめた結果ではあるが、スピリチュアリティ現象を社会学的に把握するためには、これらに該当する観察可能な特徴に置き換えるべきである。 こうした欠点を克服した定義としては、次のようなものが考えられる。

スピリチュアリティとは、 (1)通常は知覚しえないが内面的に感じられるものへの信念と、 (2)それを体験して変化をもたらそうとする実践の総体であり、(3)宗教文化的資源の選択的摂取、(4)個人主義や反権威主義といった態度が、程度の差はあれ、ともなうものある。

第一の心理学的な定義は、スピリチュアリティ概念の「内包」（人々が言葉に込める意味内容）に当たるが、この第二の社会学的な定義は 「外延」（この言葉によって指示されうる対象）を確定するためのものである。また、この定義では、信念と実践

という宗教学でよく用いられる視点に要素を整理した。 スピリチュアリティ関連の文化を観察者の視点から拾うのには、第二の定義の方が適している。 その上で、「通常は知覚しえないが内面的に感じられる」 スピリチュアルなものとはどのようなものかについては心理学的な定義に戻り、欧米と日本の人々の間では「a 生きる意味や目的、 b 他者・ 死者・ 自然とのつながり、 c より高い神的な力や霊」が、想定されていると答えることができるだろう。

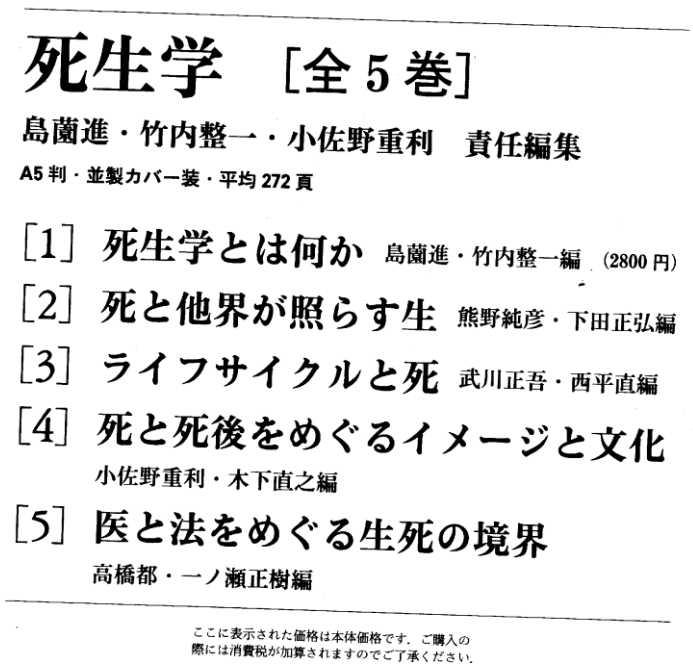
２．４　死生学

「死生学」をウィキペディアで見て見ると次のとおりです。

死生学が対象とするのは、人間の消滅、死である。

死生学の開拓者の一人、アリエスによれば、「人間は死者を埋葬する唯一の動物」である。この埋葬儀礼はネアンデルタール人にまでさかのぼるもので、それ以来長い歴史の流れの中で、人類は「死に対する態度＝死生観」を養ってきた。

死生学はこのような死生観を哲学・医学・心理学・民俗学・文化人類学・宗教・芸術などの研究を通して、人間知性に関するあらゆる側面から解き明かし、「死への準備教育」を目的とする極めて学際的な学問である。


死生学 ［全５巻］
島薗進・竹内整一・小佐野重利　責任編集
A5判・並製カバー装・平均272頁
［1］死生学とは何か　島薗進・竹内整一編　(2800円)
［2］死と他界が照らす生　熊野純彦・下田正弘編
［3］ライフサイクルと死　武川正吾・西平直編
［4］死と死後をめぐるイメージと文化　小佐野重利・木下直之編
［5］医と法をめぐる生死の境界　高橋都・一ノ瀬正樹編
ここに表示された価格は本体価格です。ご購入の際には消費税が加算されますのでご了承ください。

死生学は尊厳死問題や医療告知、緩和医療などを背景に、1970年代に確立された新しい学問分野である。

死生学で先ず手に取るべきは次のシリーズでしょう。

Ｃ．死生学　全５巻　2008
東京大学出版会

「本シリーズ刊行に当たって」との発言が第[1]巻の始めにあります。

今や世界各地で死生観を比較しあい、新たな状況に向き合うための模索が進んでいる。こうした状況を踏まえ、東京大学の大学院人文社会系研究科（文学部）では、

医学部・ 教育学部などの他部局と協力しながら、二〇〇二年よりニ一世紀ＣＯＥ「死生学の構築」プロジェクトを進めてきた。

二〇〇七年から二〇一二年春まではグローバルＣＯＥ 「死生学の展開と組織化」を進め、新たな学問領域の確立と若手研究者の育成を目指して、さらに強力な教育・ 研究体制の構築を目指している。

シリーズ『死生学』はこの二つのＣＯＥのプロジェクトの取り組みのなかから生み出される。

まずは基盤を広げことに主眼を置いている。 医療現場や死に面した人々、死別の悲しみに耐える人々のケアの現場と密接に関わる「臨床死生学」の領域をつねに見すえている。人文学・ 社会科学と自然科学の橋渡しが必要になる分野だと自覚もしている。

第[1]巻「死生学とは何か」◎ の目次の概要をご覧に入れます。

目次の概要

I 死生学とは何か

1章 死生学とは何か——日本での形成過程を顧みて 島薗 進

2章 死生学と生命倫理——「よい死」をめぐる言説を中心に 安藤泰至

3章 生権力と死をめぐる言説 大谷いづみ

4章 アメリカの死生観教育——その歴史と意義 カール・ベッカー

5章 英国における死生学の展開——回顧と現状 グレニス・ハワース

II 死の臨床をささえるもの

6章 生と死の時間——〈深層の時間〉への旅 広井良典

7章 なぜ人は死に怯えるのだろうか 芹沢俊介

8章 エリザベス・キューブラー・ロス——その生と死が意味すること。 田口ランディ

9章 「自分の死」を死ぬとは 大井 玄

10章 死の臨床と死生観 竹内整一

もっと手軽に死生学の全体像を掴みたいであれば下記の書籍が良いかも知れません。

石丸昌彦 「死生学入門」2014 ＮＨＫ出版 ◎

但し、本書では本編のポイントとしている超常現象 (「死後の生命」、「生まれ変わり」など)がらみのテーマには全く触れられていません。

この事は、科学的に見て怪しい点のある超常現象などを論ずる事に対する反発が相当数の学者たちにある事を示しているのではないかと思います。

その超常現象ですが、私が一番興味を持ったのは、シリーズ第[2]巻「死と他界が照らす生の第 5 章「死と死者への感受の道」に引用された下記の書籍です。

マイケル・タルボット著 川瀬 勝訳 「投影された宇宙 ホログラフィック・ユニバースへの招待」 2005 年新装版 春秋社 ◎

書籍の腰巻に曰く

私達の世界はすべて、時空を超越したレベルからの投影である。
ホログラムとしての脳、魂の影、臨死領域、そして全観的宇宙…
奇妙ではあるが、科学的に確かな数多くの事例を根拠として構想された、
ダイナミックな宇宙観への招待

霊魂の存在を強引過ぎると思うが、量子論、宇宙論的に理解しようとする試みです。

おわりに

死生学、スピリチュアリティのカバー範囲は極めて広く、その全体像を纏める事は、私の力不足もあり、初めから諦め、ご覧の様に霊魂の問題に絞った形で纏めて見ました。

関心を持たれた方には、お勧めしたい書籍に◎を付けておきましたので参考になさって下さい。

私は、今回読書を重ねる内に不死の霊魂の存在はありそうな気もしてきています。もし存在するなら大天才に生れ変って、この問題の解決に取り組んでみたいものと思ったりしているところです。

老い先短い年寄りの他愛もない夢とお笑い下さい。